2 F1- 4

住空間の意味構成とモノ

Interactive formation of the life of people, house space and their belongings

黒石 いずみ [1]
Izumi Kuroishi

青山学院女子短期大学 教養学科教授
Professor, Aoyamagakuin Women's Junior College

In the modernization process, the field of architecture failed to construct the conceptual framework for the interactive formation of the meanings between the life of people, house space and their belongings. The phenomenological research Kogengaku by a Japanese architect Kon Wajiro presented actual method to describe the naturalistic, theatrical and economical features of peoples' life in their house, which was developed by Hani Motoko's illuminating work to redevelop people's lifestyle. This study aims to analyze the process of the transformation of the understanding and presentation of the relationship between the life of people, house space and their belongings in these works, and to examine what effected on their works and what meanings of the things and experiences were lost in such process.

1. はじめに

現代の住生活の質を考えるときに、空間とモノとの関係は非常に重要である。それは絶え間なく増え続けるモノの処分方法や収納といった手法の研究や、モノの数を最小限にすることで空間の行動効率を上げるといった機能的研究以外に、モノが多く置かれている日常的空間が備える心地よさについての考察等、モノの諸特徴が人間心理に与える影響、人間のモノとの関わりや経験がモノに与える様々な意味についての研究といった分野での、学際的で多様なアプローチを必要としている。

建築の空間や造形に関する分野では上記のような問題を、心理学の理論を用いて人間の身体的経験がその心理に与える影響という側面から考察し、また芸術哲学のモノが表象する人間の歴史的経験が人間にとって存在論的意味を持つことを論考する研究を援用した研究がなされている。しかしながら一方で、現在においても建築空間の設計では、特に重要な意味を持つ要素を中心として設計する場合以外では、主として空間の大きさと機能の考察にもとづくその配置や関係性に関する構造的考察を行い、日常的なモノの存在は副次的・付加的に扱うのが通例であり、その理論的な枠組みは未だ十分ではない。

ところで、建築学の領域に於けるこのような思考の枠組みは所与のものではなく、その形成は近代建築思想の定着以後と言ってよいと思われる。近代建築思想の形成期には建築空間と人間とモノの関係に関する理解についてジレンマが生じている事例が見受けられる。その最も明らかな事例として、ウィーンの建築家アドルフ･ロースの建築理論が上げられる。ロースは近代建築の純粋性を損なうものとして「装飾」を取り上げたが、それが意味するものは構造体に付加された直接的な機能を持たないモノであった。「装飾」とは 19 世紀までの建築造形の主たる対象だった歴史的「様式」を構成していた構造体への付属物や色彩全般であったが、それは建築の社会的な意味を表現する役割を持っていた。したがってロースは、これらのモノにまつわる過去の社会的な意味の束縛から自由に新しい建築空間を考えることを望んだのである。しかし一方で彼は「家族の記憶をよみがえらせる絵画を住居空間には置くべきだ」と述べて、空間の意味が機能的なものだけでなくモノによって形成される象徴的次元があり、住宅においてはことさらにそれが重要であるという認識も持っていた。だがこの「装飾」に関する機能と象徴的な意味の相克に関して彼は明確な論考を残しておらず、それが近代建築の空間とモノの議論の一つの限界となっている。

このような近代建築思想や理論における空間の純粋化・抽象化の進展に対して抱かれた問題意識や、開発地域における住宅建設の重要性の増加に伴って、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて人文地理学や博物学、民俗学的視点から住空間内のモノに注目する研究がさかんになった。それは異質な風俗、生活様式を理解することを通して別の文化における異なった「空間」認識の存在や、その意味形成の過程の再検証を促すものだった。これらの様々な領域に於ける、そして様々な立場からの空間とモノと人間の生活経験の相互関係に関する理解は、皆ある意味で近代化過程において同時代的に展開したといえるが、それは実際の生活環境におけるモノと空間と人間の関係にどのように影響を与えていったのだろうか。本研究では、このような問題意識から 20 世紀初頭の日本の婦人雑誌における生活財調査と住空間改善の啓蒙運動を題材に、住まい空間に於ける生活経験とモノの関係の認識や、意味形成の変化の過程を考察する。

2. 住宅空間に於けるモノへの視点の展開

19 世紀から 20 世紀にかけて建築空間におけるモノへの視点の事例には次に上げる三つの特徴的な表現方法とその展開が見られたと言えよう。第一に挙げられるのは、博物学における視点の建築的展開である。欧米各国による帝国主義的な海外進出に伴い、各地の異文化の理解を目的とした民俗調査や考古学的・地理学的研究が行われたが、その調査や研究で得られた多様なモノを展示することで異文化を鑑賞する博物館的な建築空間、あるいは建築空間内のモノに対する博物学的視点が発達した。またその物証的な資料の膨大さと多様さは、モノの分類や科学的調査･分析の方法の発達を促した。第二に挙げられるのは、ロマン主義文学や演劇におけるモノへの関心の深化である。近代社会の発達により市民生活が多様化し、個人の主体性や多様性が重視されるようになるに伴って盛んになった文学や演劇では、細かな生活の状況とその心理的な意味の描写が発達した。バルザックの演劇に見られるようなモノの細部の表現がその所有者の人生を表象するという考え方や、空間と

黒石いずみ，青山学院女子短期大学教養学科教授，
eaaa0925@nifty.cim

モノ、人間の身体行動の関係に内包される意味への関心が深まった。第三に挙げられるのは商品学における所有財や生活財の研究である。それは都市で急激に進む消費行動とそれが社会組織や都市景観、住宅生活に及ぼす影響の研究が主に統計学的に行われたが、それはモノの意味を均質化された貨幣価値の基準で測ることで市場を客観的に把握することを目ざすものでもあった。（図１）

日本においては、明治末期、大正時代から都市部を中心とした生活近代化運動や農村地帯の生活改善運動が行われたが、上記のような住宅空間に於けるモノの表現や理解の視点に対する関心が深まったのは、1910 年代末からの農村生活調査においてだった。そしてそれは 1920 年代から戦前にかけて、独自の展開をなしとげ、住宅空間とモノの関係に関する考察の視点や具体的調査方法が発達した。特に、建築家であり民家研究者でもあった今和次郎による都市や農村の生活に関する現象学的な研究である考現学は、同時期に欧米で展開した上記の三つのアプローチを融合して具体的に実践し、その手法を開拓したという点で重要であり、日本の生活空間研究に大きな影響を与えた。その最も顕著で社会的に影響力のあった事例は羽仁もと子主催の友の会による活動に見られるものである。羽仁もと子の活動は庶民の住宅空間や生活財の西洋化と経済合理化を進めようとするものだったが、今和次郎の考現学のそれと比較すると、羽仁もと子が今和次郎とは異なった人間と空間、モノの関係の意味基準の形成を次第に構想していったことが、その調査と指導の方法や表現手法からうかがわれる。

3. 今和次郎の考現学

今和次郎が考現学を始めたのは、関東大震災後の東京の復興を都市発生史として記述するためだった。彼は三つのテーマ（服装、持ち物・行動・住居）を設定し、1925 年の銀座風俗調べ以来、新家庭品物調べ、歩行者の歩くリズムの図など多くのテーマの調査を行い、人々の経済的階層と風俗の関係を比較考察した。大きな特徴として、スケッチや統計図表、写真を用いて「都市の人々の消費パターンと習慣を研究し記録する」ことを試みると述べている。つまり消費社会における人間と物との多様で密接な関係を空間的にそして具象的に描き出した。また、考現学を社会学の補助であり人類学・民族学・民族史と同じ方法を用いて現代を対象とし、分類・記述・比較、という三つの作業で成る科学的なものだと説明している。

住居というテーマの「新家庭の品物調査」で今は、家の中の道具・思い出の品々・家具等をスケッチし、それらの特徴や由来を所有者から聞き取って正確に記述した。同様に、家の細部や平面図と立面図、そして物が使われていた場所と周囲の状況なども細密に描写している。（図２）1925 年１月の「新家庭の品物調査」で今和次郎はその主旨を第一に品物使用の変移と始末、第二に品物に現れる個人的特徴や地方性、第三に社会的階層性と物品の占有されている状況あるいは使用されている状況の関係、そして第四に品物そのものについてのあるいは処理することについての技巧と要約している。

その中で今は、物が人間の「ネガティブな肖像である」として丁寧に観察する必要を説いて、これらの品物は個人の空間を作り出し、その持ち主の人格や生活スタイルを反映していると説明する。さらに、現代の古物商の組織化による家庭内の品物の新陳代謝の提案、個性を無視したイデオロギーとしての文化生活への批判、そして家具の配置、押入れの取り方、道具の備え方のテクニックの研究の必要を説いている。すなわち、今和次郎の調査と分析にはモノと人間の関係についての三つの視点が共存している事がうかがわれる。第一に、フェティッシュな次元での人と物との関係への関心であり、それは物の意味の歴史的で象徴的な次元を含んだ多様性や細部に対する興味や、人間の記憶や心理との関係への関心でもある。第二に、近代日本の急激に変化する生活様式の安定と健全化のために、規範としての「標準」生活像を探求しようとする意図である。それは歴史的な事例の普遍的な特徴の解明と共に、用により抽象的に規定される住宅空間とモノとの関係を明確に科学的に記述することへの関心を伴っている。第三に、住宅空間とは人々がモノの処理を通して主体的に使いこなす空間であるべきだという考え方に立ったモノと空間の関係の変化の理解の仕方を探求する姿勢である。第一と第二の視点には相克する側面があることを自覚しつつ、第三の視点において、その相克そのものが実際の人々の生活における独自な創造性の源だと考えたのではないだろうか。

4. 羽仁もと子の生活財調査と研究

初期の『婦人の友』発行から、羽仁もと子は婦人の地位向上と生活環境の改善のための啓蒙活動を行っていたが、明治 43 年代から扉ページに連載された住居内の各細部写真とその合理的なあり方についての解説は、彼女が具体的で明確な生活像の提示を重視していたことをうかがわせる。1917 年に内務省から出された国民教育政策は、文部省を中心とした生活改善運動に発展し 1927 年には大日本連合女子青年団の設立、1930 年には婦人団体による「国運を伸張する」ために家庭生活の改善を図ることが求められ、大日本連合婦人会が結成される。米国で家政学を学んだ井上秀子は女性文化展で、「婦人と経済」という展示で「標準生活費」について、衣食住を合理的な標準生活に理想化してゆくことが現実の社会状態での急務であると主張している。このような生活の「標準」観念が生活・住宅改善運動における中心思想となるにつれて、羽仁もと子の生活像の提示の仕方は変化していく。

昭和 10 年から始まる「南沢農村報告」とそれに続く「一人分一軒分持ち物調査」では、生活の基盤となる農作業空間の分析から次第に生活財の具体的で詳細な記述へと力点が移っていく。そして各家庭の衣服や所持品の種類や数、値段のリストアップをさまざまな地域、職種、経済的状況の家庭を対象にして行った。初期段階では衣服の補修等、所有者がモノを維持する方法等についての記事もあるが、次第に多くのボランティアを募ってその調査と記録を奨励しさらに合理化の努力を行うように競争を促す方法へと変わる。さらにその過程を継続的に掲載し、ボランティアたちの生の声も掲載して記事の実感を増すと共に、望ましい生活像を具体的な所持品や生活空間の視覚的提示によって読者に伝えるという方向へ進んだのである。

昭和 11 年に『婦人の友』に発表した「がらくたの無い家」、「一人一家標準持ち物調べ」と言う記事は、その一連の試みを簡潔にまとめた例である。「一人分一軒分持ち物標準図解」（図 3）では、明らかに今和次郎が行った考現学による家庭の持ち物調査の成果を応用している。そこには、当時平均的とされた規模の住宅の平面図、家族の顔、洋服や持ち物、道具などの絵と数、箪笥や引き出し、棚の中にしまわれている様子や置き方、個数を透視図法でカラフルに表現している。また、人物の姿と共に、子供部屋、

居間、食堂、主人の持ち物、娘の持ち物、主婦の持ち物、赤ん坊の持ち物、幼児の持ち物、風呂場・玄関・洗面所・洗濯所・物置に置くものの一切、台所の設備器具一切が描かれているのである。

そして次のような説明が付いている。「5 人で 25 坪の家に住むとして、その家に必要なもの一切を描いてみました。この家の特色は、新時代の明るい家庭生活の様式にふさわしく、簡素を旨としております。」「思い切ってガラクタのない家にしてください。・・・新しい年を迎えてすっきりと働きよい家にいたしましょう。」と説くのである。さらに羽仁は、住生活改善の三つの条件として、第一に住宅の外側を整えること、第二に家屋の内部すなわち家内各室の清潔整頓。客間は客間らしく寝室は寝室らしい形に整っていること。そして第三は経済の筋道が整っており消費を慎むことをあげている。そして「人が来ると隠すような人は、自信がない人であり必ず他方において見栄をする人だ。」というように、これらの簡易生活の条件がすべて住人の人格的な問題であると述べて生活合理化をイデオロギーとして推進している。

5. 空間･モノ･人間の間の関係と啓蒙主義

今和次郎の考現学と羽仁もと子の調査･研究を比較すると、考現学によるモノと住空間の調査とが、羽仁もと子の研究において標準・合理化の基準を求める手段として一層明確な方向で応用されていること、またそれが雑誌メディアにより生活モデルの視覚的情報を提示する目的に用いられ、それが一見科学的手法であるために、情報そのものが全て科学的真実であるかのように伝わったことが分かる。また両者ともに当初は所有者の特質を職能や経済力を中心に考え、産業の近代化･西洋化とそれにふさわしい生活様式の普及が必要だと考えていたために、モノの量とその貨幣交換価値とを生活様式を客観的に計測するため基準として用いていた。しかし、羽仁もと子がプロテスタンティズムにもとづく啓蒙主義を倫理的なイデオロギーに展開し、モノの所有欲と管理能力が所有者の知的・精神的な特徴に直接関連しているという思想を抱いたのに対して、今和次郎は単に社会的な立場の一面を示す尺度として所有者の職業とモノの貨幣価値を見ただけだった。その結果、今和次郎の調査に見られたモノと人間の間に存在するフェティシュな感覚への関心やモノの個別性、象徴的な意味に対する関心は、羽仁もと子の調査には殆ど不在である。また、今和次郎の調査に含まれていたモノの置かれ方、組み合わせ方、季節を味わうことや多様な人間関係といったモノにこめられた物語の描写もまた羽仁もと子の調査には不在であったという差異が生じた。

羽仁もと子の「一人分一軒分持ち物標準図解」に描かれた住居空間は、典型化された家族像にもとづき、生活に必要な機能と広さ、合理的な動線で単純に空間と意味が構成されたものであり、「余分」なモノは描かれていない。すなわち、モノに対する無意識の次元での感覚、歴史的で身体的な個人の生活経験とモノとの関わりの中で形成されるモノの象徴的意味といった、モノと人間との多様な関係や「意味」の個人性、人間の記憶に関連する側面といった見えない意味がそこからは捨象されてしまうのである。

言い換えれば、モノそのものの価値や数、形象への関心が過度に強まることで、客観的価値基準としての経済的貨幣価値、空間や時間の合理的構成が重視され、主たる機能をになうモノたち以外の「余分」なモノの意味が見失われ、モノの象徴的意味や記憶により形成される意味、環境や他のモノとの関係、モノが使われる場所や時間に由来する個別性、多様性といった目に見えない重要な部分が重視されなくなるということが、今和次郎と羽仁もと子の生活財調査の比較からはうかがえるのではないだろうか。

かつてローマ時代の建築には「記憶装置」としての働きがあったと言う。人々は空間の中におかれた様々な英雄の像やモノの形と関連付けて自分の演説の語句を記憶し、それらを目でたどりながら臨機応変に長大な演説を行った。すなわち、そこには人が空間を再構成し、そこに存在する意味をよみがえらせ、さらに空間やモノに新たな意味を読み込んでいく行為が存在したのである。空間やモノの意味を基準化し抽象化して、それを客観的で体系的な意味と価値に置き換えて記録として定着しようとすることで、モノと場所の関係やモノの価値の多様な解釈といったモノと空間、人間の生活経験の間に形成される相互的で動的な意味の豊かさは奪われ見失われる可能性があり、それを乗り越えるには、記憶の中から新たな意味を生み出していく人間の主体的な創造性が必要なのである。

参考文献

- [黒石いずみ　2000 年]　黒石いずみ:『建築外の思考:今和次郎論』, ドメス出版. 2000
- [黒石いずみ 2004 年] 黒石いずみ: 考現学における「物」と建築空間：今和次郎に続く者たちの仕事から, 日本建築学会関東支部大会梗概集. 2004
- [今和次郎・吉田謙吉　1986 年]　今和次郎･吉田謙吉:『モデルノロヂオ　考現学』、学陽書房、1986 年
- [近藤雅樹　2003 年]　近藤雅樹編：　『日用品の 20 世紀』　ドメス出版、2003 年
- [羽仁もと子　1927 年]　羽仁もと子:『羽仁もと子著作集』 家事家計編、婦人之友社、1927 年
- [羽仁もと子　1936 年]　羽仁もと子編著：『婦人の友』新年号付録、婦人之友社、1936 年
- [吉田謙吉　1930 年]　吉田謙吉：　『舞台装置者の手帳』、四六書院、1930 年

図１．今和次郎「スカートの長さの変遷」『全集　服装史』より

図 2.今和次郎　「新家庭の品物調べ」『全集　考現学』より

図 3.　1　羽仁もと子「一人一軒分の持ち物はどれだけ必要？」

図 3.２．羽仁もと子　「一人一軒分の持ち物はどれだけ必要？」
『婦人の友』昭和 11 年新年号より